

【連載】 ほな男になれや！

とりがら016

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは、同じ世界を生き、同じ世界を終え、同じ世界に生まれた男女が織りなすド下ネタ異世界TSギャグコメディ。

# 目次

そして世界は終わった	1
プロローグ	6
戦う王子	15
服を買いに行こう	22
女になる？	28
ほな俺を妊娠させろや！	35
勇者カイズ	41
勇者カイズの分析	47
女を賭けた戦い	54

## そして世界は終わった

どうやら今日には世界が滅ぶらしい。そのことを知ったのは三日前のことだった。突然テレビが切り替わり、地球にもものすごいやつが向かってきてるとかなんとかで、簡単に言うとな三日後には地球が滅びます、といった内容が全国に広がり、現代のネット社会の拡散力によつてそれは瞬く間に全国民へと伝えられた。嘘だろと嘲笑する者が何人もいたが、国会、教育機関がまとめて停止し始めるのをみて本当だと判断したらしく、今はほとんどの人が思い思いの日々を過ごしている。そして、そんな日々も残すところあと一日。

世界最後の日、人はどう過ごすだろう。家族と過ごす、恋人と過ごす、友だちと過ごす、はたまた思い切つて大犯罪をやつてみる。今までクソ上司の下で頑張つていた社会人は復讐するチャンスかもしれない。今なら警察も動かないだろうし、なんでもやりたい放題だ。現に、今俺の目の前にいるクラスメイトだつて男に襲われてたし。あの時は必死になつて助けて誰もいない学校に逃げ込んだ。助けた手前放置するわけにもいかないし、外に出たら誰に襲われるかわからないため俺が食料等を確保し続け、こうして世界最後の日を共に迎えている。

「今日やなあ」

「おう」

綺麗な顔を頬杖でぶにゅ、と歪ませて俺を見ながらの言葉に短く返す。

「夜には死ぬんかあ」

いつになくネガティブなことを言うな、となぜかじつと俺を見続けるクラスメイトを見て思う。彼女はポジティブな人間で、クラスを引っ張るリーダー的な存在だった。頭の方は少々よろしくないが、明るく常に前向きなその姿にクラスどころか学校中の生徒が惹かれていたものだが、流星に世界最後の日ともなるとネガティブにもなるか。

「どんな異世界に転生するんやらなあ」

ポジティブやないか。

「は？ 異世界？」

「そそ。今流行ってるやろ？」

「実際に転生するっていう形で流行ってるわけちゃうぞ、アレ」

あくまで物語として流行っているだけで、実際にやる形で流行っているわけではない。異世界転生なんて現実にあるわけがないし、第一あったとしてそれがどうやってこっちの世界に伝わってくるのか、という問題が出てくる。

「あんなもん現実にあるわけないやろ」

「でも死んだこともないのにそんなんわからへんやん」

「……まあそう言われると」

ない、と断言していいくらいに思っているが、確かに死んだことがあるわけでもないし異世界転生があるのを証明できないのと同じようにないことも証明できない。なるほど、アホのくせによくやる。

「せやったら異世界転生はある！ って考えた方が楽しくてええやん？」

「それはそうやな」

やろ？ と得意気に笑うクラスメイト。どうやらこのクラスメイトは世界最後の日でも変わらずポジティブらしい。

「でな。転生するならどんなところがいい？」

「どんなとこって？」

「例えばファンタジーな世界とか」

俺も学生なのでそういった創作物にはある程度触れてきている。ファンタジーな世界と言えばやはり魔法。俺たちのような科学まみれな世界で育った人間は魔法に憧れること間違いなし。更に男なら一度は憧れる戦闘もあり、剣と魔法を手に戦うその世界は確かに魅力的だ。

「ええかもせえへんな、ファンタジー」

「でも私みたいに可愛い女の子やったら、屈強な男たちに襲われへんかっていう心配があんねんな」

言つて、悩ましげなため息。そもそも異世界転生をしたときに元の容姿で転生するのかというところが気になるが、どうせこのクラスメイトなら顔が変わつたとしても綺麗なんだろうから触れないでおこう。男たちに襲われるっていうのも否定はできないし。

「それやったらめちやくちや汚いカツコして、男を萎えさせたらええんちやう?。」

「私女の子やから身だしなみには気い遣いたいやん」

それもそうか。襲ってくる男を警戒してなんで女の子側が汚くならないやいけないんだっていう話になるし、これは俺が失礼だった。

「なら女好きっていうことにして、精神的な面で男を突き放したらええんちやう?。」

「私別に女の子好きぢやうのに自分偽らなあかんの?。」

「しやあないやろ襲われたくないんやつたら」

「女の子のことが好きな女の子のことが好きな男がおるかもせんやろ!。」

「ややこしいな!。」

つまり、男のよさを教えてやるよっていう男がいるかもしれないってことだろう。確かにいないとは言切れない。俺は男だからそういうえつちな本があるということを知っている。別に俺が好き好んで読んでいるわけじゃないが、知っている。

「ならどんな男よりも強くなって、襲われても大丈夫なようになったらええやろ!。」

「私は男の人に守られたいって願望があんのに、どんな男よりも強くなつたら守つてもらわれへんやろ!。」

「知るかそんなもん!。」

「人の願望をそんなもんって言うなや!。」

あんなにみんなを引つ張つていたのに守られたい願望があるって可愛いなこいつ。ああ言えばこういうからムカついてきてるけど。

「なら世界最強の男よりちよつとだけ弱いくらいまで鍛えて、その男に守ってもらつたらええやろ!。」

「その男に襲われたらどうすんねん!。」

「お前を守ってくれてんやから結婚せえや！ そうしたら襲われたってことになれへんやろ！」

「それやったら私は生まれた瞬間から『あ、私は世界最強の男と結婚すんねんな』って思い続けて、すべての恋愛がおもろなくなるやろ！」

「世界最強の男とゴールインするって決まってるんやったら、その前に色んな恋愛したらええやろ！ 別に世界最強の男だけを見続ける必要はないねん！」

「世界最強の男がそんな尻軽女になびくんかい！」

「色んな恋愛経験して女を磨けよ！ そうしたら世界最強の男もなびいてくれるわ！」

「お前女磨いたら美しくなりすぎて襲われるに決まってるやろ！」

「またそれか！」

世界最後の日になんの話をしてるんだろう、という考えが頭をよぎったがそれを頭の隅に追いやって、文句しか言わないクラスメイトを睨みつける。こいつのどこがポジティブなんだ？ さつきから俺の提案をめちやくちやな理由で却下しやがって。ポジティブなら「えー！ それいいー！」ってバカみたいに肯定しろや。

「なら誰もおらんような秘境に行って一人で暮らせ！ そうしたら誰にも襲われへんやろ！」

「確かに誰もおらんとこで一人で暮らしてたら普段は襲われへんわ！」

「襲われへんやろがい！」

「でも秘境って言うたら修行も修行、ザ・修行スポットやろ！ しかも歴戦の猛者タイプの修行スポットや！ そんなやつがきてもし見つかったら襲われるに決まってるやろ！」

そんな状況で襲われたら助けもないし、自分でなんとかするしかない。秘境に住んでるなら地の利を生かして逃げられるだろうとは思うが、そんなことを言っても屁理屈で返されるに決まっている。それなら、

「……ほな男になれや！」

「どういうことやねん」

俺の言葉にクラスメイトが訝し気な視線を俺に向ける。なんでも前にそんな目で見られなきやいけないんだという言葉をぐつと飲みこんで、一気にまくし立てた。

「男に襲われたくないんやったら男に転生したらええやろ！ 男に転生したら体に引つ張られて女の子が好きになるし、男からも襲われへんし何の心配もないやんけ！」

「もし私が女の子好きになられへんかったらどうすんねん！」

「男と付き合え！」

「男に転生して男と付き合うってどんだけトリッキーなことしてんねん！」

「なら俺が女になってお前と付き合うわ！ それやったら身体的にも精神的にも男女になるから何の問題もないやろ！」

「言うたなお前！ 後で嫌って言うても知らんからな！」

「何でもやれや！」

そんなバカな話をしながら、俺たちは世界最後の日を迎えた。死に方なんて覚えちゃいない。どうせハチャメチャな隕石がむちやくちやに地球をぶち壊し、俺たちは塵になったんだろう。

ただまあ、こんなバカ話をしながら死ぬっていうのもいいもんだ。悲痛に死ぬよりはよっぽどいい。

確か、最後に見たのはクラスメイトの笑顔だった。そんな気がする。



## プロローグ

この世界には、魔法があり魔王がいる。数百年ごとに魔王が誕生し、それに呼応するように勇者が生まれ、その度に魔王と勇者は戦う。そしてちやうど俺たちが生まれた年に、魔王が誕生した。その魔王の誕生とともにある一人の青年が勇者としての力に覚醒し、魔王討伐への物語を歩み始める。

「エリスの形のいいおっぱいとすらりとした四肢と美しい顔と気持ちのいい性格と何か妙にエロい仕草に、かんぱアアアアアアアアアアい!!」  
「オオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

まあ、俺たちはそんな魔王と勇者の因縁だとか魔王を討伐するだとかそんな高尚な目的は何もなく、ただただ世界を旅しながら冒険者として依頼をこなし、酒を飲む毎日だった。

今乾杯の音頭にしては激烈に下品でどうしようもないセリフを吐き、だというのに……いや、だからこそ冒険者という名の荒くれものの中にいるのは、俺の前世でのクラスメイト。今世での名をリオス・アウリエという。短いツンツンとした白い髪にギラつく金の瞳。その顔立ちは芸術品のごとく綺麗で、俺がまだ男だったら嫉妬のあまりリボコボコにしておもしろアートにしたくなるほどカッコいい男。

俺の今世での名はエリス・ゼーラ。薄い青の髪をポニーテールでひとまとめにし、髪と同色の瞳。さつきリオスが言ったように自分で見ても綺麗な顔をしているな、と思う。自画自賛をするようで気持ち悪いが、男として客観的に見た時の評価だ。ナルシストってわけじゃない。

そう、何の冗談か、俺たちは丸々性別を逆転させ、異世界転生していた。あの、世界が滅亡する日に話していたバカ話が現実となったのである。つまり今の俺は性別的に言えば女だ。クソが。

「なあ、エリスがえつちなことさせてくれへんねん。どう思う?」

「何! そいつは許せねえ! おいエリス! えつちなことをさせてやらねえとは何事だ! 俺たちにもさせろ!」

「そうだ! 鬼! 悪魔!」

「きつとアイツ魔王の妻か何かだぜ。邪悪すぎる」

「女にシなこと言うやつらのがよっぱど邪悪やろうがゴミ！ 誰がテメエらにやらせるか！」

「ふふ、ごめんなみんな。エリスは私以外に体を許してくれへんみたいやわ」

「テメエにもじやりオス！ なに『仕方ないなあ』みたいな感じで首振っとなねん！」

今俺たちが滞在している街、『キユグニー』のギルド内に下品な内容と色を乗せた声が響き渡る。

ギルドは街に一つはある冒険者たちが依頼を受ける場所で、宿としても機能している。ただ、受付がバーカウンターのようになっており、広い空間に木製のテーブルと椅子が等間隔に並べられ、冒険者たちが酒を飲み大暴れするため、その見た目は酒場とならん変わりない。が、俺は今まで色んなギルドを見てきたがここまでひどいのは初めてだ。

「こらエリスちゃん。女の子が汚い言葉使わないの」

「あいつらのがよっぱど汚いて」

そんな俺はギルドの中心でバカ騒ぎしている荒くれものどもとは離れたところ、バーカウンターのようになっていて受付で酒を楽しんでいる。

今俺に注意してきたのは受付嬢のカスマ・フローリア。ふわふわとした金の髪を腰まで伸ばし、緑の瞳が優し気な印象を与える美人さん。俺が男だったら迷わず求婚していたことだろう。いや、今も心は男なんだけども。

「もう、せっかく可愛いのに……誰も貰ってくれなくなっちゃうわよ？」

「いや、私がもらうから安心せえ！ 毎日濃厚な夜を過ごそう！」

「ああ、なら安心ね」

「どこがやねん」

荒くれものどもに囲まれながらのリオスの言葉に、明るく笑って顔の横で両手を合わせるカスマは、何をもってして安心だと言ったのだ

ろうか。今俺がリオスの性欲のはけ口にされようとしていたのに。

「まあでも、エリスちゃんって結構男の子から人気なものね。リオスくんじゃなくてもすぐに貰ってくれる人見つかると思うわ」

「俺は一生独身でええわ。カスミとなら悪くないけど」

「ふふ。それもいいかもね」

カスミは微笑んで俺を一撫でした後、荒くれものどもの酒がなくなってきたのに気づいて奥に引っ込んでいった。

何あのいい女。ぜひとも俺といい関係になってほしい。さっきのは冗談で「いいかもね」って言ったんだろうが、俺は本気でカスミをどうにかしようと思う。そうしないと男が廃るってもんだ。

「お、エリス。メスの顔してどうしたん？」

「おうリオス。ぜひ死んでくれ」

今男としてカスミをどうにかしようと思っていたのにも関わらず、そんな俺を「メス」と称したアルコールで顔を赤くしてすり寄ってきたリオスを押しつけて、酒を一口。前世じゃ二十歳になる前に死んだから、酒を飲めるのは新鮮だ。つってもまだ18で、こつちじゃ16になったら飲めるから年齢的には前世とそんなに変わらない。

この俺になんとかキスしようとしているバカはすっかり変わっちゃまったが。いや、前世じゃ死ぬ前に話しただけで、そこまで仲良くなかったから変わったかどうかはわからないが、少なくともイメージとは全然違う。

リオスと俺は同じ村で生まれた。そしてなんとなくお互いがお互いのことを前世でのクラスメイトだと理解し、当然のように一緒に生まれ育ち、リオスは性欲の化身となった。

それを知ったのは15の時。村から旅立つ前に、リオスと二人で、リオスの部屋で。今なら絶対にありえないシチュエーションで、「ところで、いつになったらやらせてくれるん？」と聞かれた時だ。

\*

「は？」

もちろん、俺は純粋な疑問で返した。明日から旅に出るから、それに関する大事な話をするのかと思いきや、開口一番「いつになったら

やらせてくれるん？」である。手を出さなかったのを褒めて欲しいくらいで、俺の疑問を受けたリオスは俺と同じようにそれを疑問に思ったらしく、首を傾げていた。

なんでやねん。

「え？ ほら、死ぬ前『なんでもやれや！』って言うてたやん。いくら許しをもらってるとはいえ、いきなりすんのもなあって思っつて待つてたんやけど、何も言うてくれへんし」

「いや、なんでもやれやとは確かに言うたかもせんけど、普通に嫌やで」

「は？」

「ブチギレやないか」

綺麗な顔してるから怒ると雰囲気があって怖いからやめてほしい。その怒ってる内容はとてつもなくくだらないが。

「や、だって俺中身男のまんまやし」

「関係あらへんやろそんなもん。快感に性別は関係あらへん」

「気持ち的に無理やって言うてんねん」

「わかった。じゃあ言い換えるわ。やらせてくれ」

「なんか言うてること変わったか？」

部屋に入って俺をベッドに座らせ自分は床に座るといふ紳士っぷりはどこへやら。リオスは俺の隣に座って、真剣な眼差しを俺に向けていた。俺の太ももに手が置かれているのは、そういうことだろうか。

「なあエリス。ほんまに嫌やったら言うてや？」

「嫌って言うたの聞こえへんかったんか？」

「私も無理やりしたくないし……」

「ほなこの胸に伸びてきてる手止めろ。触ったらマジでぶっ飛ばすぞ」

なんでこいつ下手な男より性欲強くなってるの？ 普通転生して性別変わっても、前世での性別を引きずってなんか変な感じになるのが普通だろ。俺みたいに。

「最後やエリス。ほんまに嫌やったらやめる。エリスが嫌がることは

したないねん」

「じゃあ嫌やからやめてくれ」

「どうもありがとう」

その瞬間、俺の本気の魔法によってリオスは星になった。実際は俺の得意な水の魔法を本気で撃って、リオスが窓から放り出されたというだけだが、二階から叩き落されて本気で目の前に星が見えたらしい。

\*

「なあエリス。やらせてくれ」

「こりろやお前」

三年前を思い出し、現実に戻ってきてみれば目の前に進歩のないリオス。なんで俺はこいつと一緒に旅を続けているんだろうか。いつ襲われてもおかしくないのに。

……とは言いつつ、実際こいつは本気で襲ってこない。ガチでやればリオスは死ぬほど強いし、勇者にも引けを取らないだろう。何度か勇者パーティと会ったことがあるが、その度に勧誘されていたことを思い出す。俺もついでに誘われたが、リオスが「私勇者ちゃうし」といつものほほんと断っている。

そんな勇者にも勧誘されるようなやつが本気で俺を襲えば、一瞬だ。なのにそれをしないってことは、性欲の化身に見えて実はそこそこ良識がある。

「エリスってええ脚してるよな。挟んでくれへん？」

やっぱりない。

ふざけたことを抜かすリオスが座っている椅子を蹴飛ばしリオスを床に転がすと、水の魔法を顔面にぶっかけた。もちろん殺傷能力はない。

「ほんまに年中発情期やな。てか、ええ脚つて見えてへんやろ」

「ほら、ローブからうつつすら形が見えた時めちやくちやええ脚してんなーって思うねん。一時期ビキニアーマーだけ着てくれへんかなあつて思ってたけど、逆にエロくてよし」

「もっぺん酔い覚ましに水ぶつけたるか」

「ごめんごめん。セクハラがすぎた」  
「ったく」

水をかけたことで少し酔いが醒めたのか、椅子を立て直してそこに座り、どこからともなく取り出した酒瓶に口をつけてラツパ飲み。ほんとに前世女だったのかこいつ？ 男らしすぎへん？

そんな男らしいこいつは、人の装備にもケチをつけてくる。やれビキニアーマーだけにしろだとか、むしろ何も着るなだとか。俺が心から女だったら斬首刑に処されるレベルでひどいセクハラをリオスはかましてきている。他の女の人にはやっていないから俺に対してだけ冗談で言っているのだろうが、ムカつくことにはムカつくし気持ち悪いことには気持ち悪いので、白を基調とした所々に細かい青の刺繍が入っているローブを着ることにしている。これなら肌も出ない。

リオスはスーツにエンジ色のカッターシャツと、ホストのような恰好に、フアンタジーな世界観に合わない日本刀を帯刀している。曰く「カッコいいから」というだけで、別に魔的な意味があるとかそういうわけでもない。俺でさえ魔法防御と魔力制御向上が付与されているローブを身に纏っているっていうのに。

「そういうエリス、知ってる？ 私ら結構有名になつてんねんて」  
「は？ 俺らが？」

「そうよ。冒険者の間でね」  
「やっほー、カスミちゃん」  
「やっほー、リオスくん」

奥から出てきたカスミにリオスが手を振ると、カスミもお上品に手を振ってリオスに挨拶。親しみがあつて美人でいい性格。ほんとに結婚してほしい。

「なんでも、世界を旅する二人組の実力者。『迅雷の騎士』、『流水の巫女』って呼ばれてるそうよ」

「はずっ」  
「よなあ。私も聞いた時ぞわぞわしてたわ」

勝手に二つ名つけられて喜ぶような精神性だったらどれだけよかったことか。前世での自分なら喜んでいたかもしれないが、いざ実

際につけられると恥ずかしいっていう感想しか出てこない。

その辺りリオスも同じだったようで、どことなく居心地が悪そうに目を泳がせている。

「魔王軍の幹部も残り五体だし。戦力を募って魔王領に攻め込むってことも考えられるから、そうになると二人とも王都に召集されるかもね」

「勘弁してくれや」

「私たちは普通に旅して普通に生きて普通に死にたいからなあ。魔王との戦いはごめんやわ」

俺たち二人のスタンスは一貫しており、『自由』。これに尽きる。

誰にも縛られることなく、自由に世界を旅して、自由に生き自由に死ぬ。魔王は勇者に任せればどうにかなるし、実際どうにかなくても。魔王軍の幹部とかいうわけのわからん十二体いた激つよ魔族も勇者パーティの手によって半分以下になってるし、このまま勇者が魔王を倒してくれるだろう。待っているだけで安全な生活が訪れるんだ。自分から命を捨てに行くバカはいない。

「えー。でも参加したらお金いっぱいもらえるわよ？」

「旅して依頼こなしてりや生きていける分はもらえるから、別にええかな」

「問題はほんまに召集があつたとして、それ断ったら王命を断つたつて言われて立場が悪くなる、とかやな」

「めんどくさい」

これはほんまにめんどくさい。依頼の報酬の何割かは王都から支払われる。それが、さっき言ったように王命である召集を断れば、支払われない可能性だってある。クソみたいな話だが、強いやつをコマにしたって考えるやつらのやりそうなことだ。

「じゃあもしほんまに召集されたら顔だけ出そか。めんどくさいけど」

「せやな。めんどくさいけど」

「ほんとにもう。仕方ないんだから」

ぶんすかしたカスミは酒を持って荒くれものどもの方へ行つてし

まった。

カスミから見ると俺たちは人任せに見えるんだろう。勇者に任せりやなんとかなるから、自分たちは安全なところでのほほんとしておこう、みたいな。実際そう思ってるから何を言われても仕方ない。

だけど一回死んでるんだから、今世は好きに生きさせてほしい。また若いうちに死ぬのはごめんだ。俺かりオスが勇者じゃなくてほんとはよかった。リオスが勇者だったらなんだかんだ俺もついていてたただろうし。

「早く魔王倒してくれへんかなあ」

「あのクソ勇者なら大丈夫やろ。強いし」

「なんかリオスって勇者に当たり強いよな？」

「そんなことないで？」

否定する割に、俺から何かを隠すように目を逸らす。

勇者との出会いは、俺とリオスが旅に出て数か月。同じく旅に出たばかりの勇者と、ある街でばったり出会った。その時勇者は一人で、仕方ないからとしばらく行動を共にし、一人目の仲間ができたところで別れたことを覚えている。

思えば、なぜかその時からリオスは勇者に対して当たりが強かった。勇者に対してだけ口が悪くなる、といったそれだけのものだが、勇者が何か悪いことをしたわけでもないのに本当になぜかりオスは勇者を嫌っている。

「勇者がリオスと同じくらいカッコいいから嫉妬してんの？」

「エリス、勇者のことカッコいいと思うん？」

「ん？ そりやそうやろ。どう見てもカッコええやん」

艶のある黒い髪に、空のような青い瞳。キリっとした顔は勇者が歩くだけで女の子がひっそりキヤーキヤー言うほど整っている。雰囲気はどこどことなく荒々しいから、それも手伝って女の子に大人気だ。

「嫉妬してるで」

「ん？」

リオスが酒をカウンターに置いて、顔を寄せてきた。

「勇者がエリスにカッコいいって言われてムカついている。私だけに言



うて」

「ふーん。なんや可愛らしいところあるんやなあ」

「え？ それはつまりやってもええってこと？」

俺は迷わず拳を振りぬき、リオスをぶっ飛ばした。カウンターに並べられた椅子をなぎ倒しながらぶっ飛んでいくリオスを見ながら酒を一口。

……正直セクハラ以外のアプローチが初めてでちよつと動揺したが、すぐセクハラしてくれてよかった。おかげで正気を取り戻せた。

床に倒れながら「いけると思っただのに……」と呻いているリオスに中指を立てて、俺は小さく笑った。

これは、魔王から世界を守る物語ではなく、俺が貞操を守り抜く物語。

バカバカしいなんて言うことなかれ。俺にとってこれは、非常に重要なことなのだから。

## 戦う王子

朝、キユグニーの街中。世界を旅して依頼を何度もこなし、懐にそこそこ余裕のある俺たちは今日は依頼を受けずにゆっくりしようと思ふらぶらと街を歩いていた。時折俺の手に触れて「あ、ごめん！」と『初心な友だち以上恋人未満の男女ごっこ』をしているリオスを見無視して、活気のある街並みをぼんやり眺める。

ここキユグニーは王都から近い位置にあり、滞在しているここ数週間で王都の軍のやつらが街を歩いているのを何度か見かけた。動きづらそうな鎧を装着して、胸に翼を広げた鳥の紋章があるそいつらは、俺たちを見るたびに挨拶してくる。

なぜか、なんて理由は一つしか思い当たらないのだが。

俺を路地裏へと連れ込もうとしているリオスを張り倒し、前から歩いてくる理由に軽く手を振った。前から歩いてきたのは赤い短髪をツンツン立たせ、柔らかい金の瞳に、赤い鎧と高そうな革の籠手をつけたイケメン。

「おう、リオス、エリス！ 久しぶり！」

『戦う王子』、アリエス・クロード。

「久しぶりアリエス。お前こんなところで何してんねん」

「ついにリオスを捕えに来てくれたん？ 恩に着るわ」

「ちげえよ。エリスが本気で望むんならひつとらえていいくらいひでえセクハラしてるけどよ」

アリエスの正論に、リオスが「え？」と本気で困惑した様子で俺を見た。え？ じゃねえよクソセクハラ野郎。俺が訴えりや一発だつてこと見せてやろうか？ 今ここで。

相変わらずっぽいな、とリオスを見ながら笑っている『戦う王子』とアリエス・クロードは、世界を旅して困っている人を自ら力を振るって助けるといふ人格者。こいつと俺たちは偶然何度か出会ううちに、アリエスが俺たちを『友だち』と触れ回ってしまうほど親しくなり、それが理由で軍も俺たちに挨拶してしまう事態に陥ってしまった。

跡を継いで国王になっても旅をしそうだというところで国王が頭を悩ませているらしく、最近一刻も早く結婚して子どもを産ませる動きに出たらしい。それを聞いたのはアリエス本人からで、数か月前偶然会ったときに「行くところ行くところで見合いさせられてる」と愚痴っていた。

今回もそうだろうと思い、「また見合いか?」と聞いてみると、アリエスはバツの悪そうな顔をして視線を泳がせた後、爽やかに笑った。「逃げてきた!」

「は?」

「だからさ、あまりにも見合いさせられるから逃げてきたんだよ。ほら、いつも俺についてくれてる二人がいねえだろ?」

「そういえば……」

アリエスには付き人としてツバキ・ロメリアという超絶美人さんと、ダリア・エニキスという渋くてカッコいいおじさんがついてる。しかし今はアリエスが言ったようにその姿はなく、どうやら撒いてきたらしい。あの二人、めっちゃくちゃ強いのによく撒けたなあ。

「でもここ軍がちよこちよこおるから、すぐバレてまうで?」

「せやろな。どうせアリエスが逃げたこともう軍に伝わってるやろし」

俺がリオスに同意すると、アリエスは自信満々に胸を張って「聞け、俺のすばらしい作戦を!」と街に響く大声ですばらしいとのたまう作戦を発表してくれた。

「まさかこんな軍がいるような場所に王子が逃げるはずないっつー思考をついたんだ! 俺が見つかったも『いやまさかな』って思っただけ見逃すはずだ! どうよこの作戦! 完璧だろ!」

「いたぞ、王子だ!」

「なぜバレた!?!」

「大声出すからやろアホ」

アリエスの後ろ、つまり俺たちの視線の先から軍が五人、アリエスをひっ捕らえようとしやがしや鎧から音を立てながら走ってくる。それに驚いているアリエスのアホさ加減に呆れていると、アリエスが

俺の手を掴んで走り出した。

「は、ちよつ、離せやアホ！」

「クソつ、なんでバレたんだ!? 俺の作戦は完璧だったはずなのに！」  
「そら大声出してそつち見てアリエスがおつたら『あ、アリエスや！』つてなるやろ！」

「なあエリスはどう思う? なんでバレたんだ!？」

「大声出したからや、つてかそもそも作戦穴だらけやねん! そら軍がおる街の真ん中で堂々とおつたらバレるやろ！」

「不思議だ、なんでバレたんだろう……」

「俺の手え掴んで話しかけてきてんやつたらせめてちゃんと会話しろや! 今どういう状態やねんコレ！」

「なあなあアリエス。おもしろそうやから私ちよつと軍蹴散らしてきていい?」

「ええ訳あるかアホリオス! てか何で疑問も何もなく並走しとんねん！」

ぎゃーぎゃー騒ぎながら軍との距離をぐんぐん離していく。そんな走るのに邪魔なくらいだったら鎧やめときやいいのと思いがらも、じゃあ鎧つけてるのに速く走れるこいつはなんなんだとアリエスを見てみると、後ろに軍が見えなくなったところで俺たちはギルドへと突入した。

「あら、リオスくんにエリスちゃん。それに王子まで。どうしたの?」

「カスミさんだっけ? ちよつと匿ってくれ! 軍に追われてる!」

「いいわよー。リオスくんかエリスちゃんの部屋に入つてて」

「なんでええねん! ちよつとは理由聞けや!」

「人が困ってるんだもの。手を差し伸べない理由なんてないわ」

「ほんまええ女やな! 結婚してくれ!」

「機会があつたらね?」

優しく微笑むカスミを後にして二階に上がり、俺たちは俺がとつてある部屋に入った。男二人が「いやあ何とか撒けたな」「まだ安心すなよ。きつとギルドにくるはずやから」と喋りながらベッドに腰掛ける。

俺は椅子を引つ張り出して座り、呼吸を整えた。そして未だ繋がれている手を見る。

「アリエス。俺の手え掴んだ理由はなんや？」

「……あ、わりい！ 女の子の手、断りもなく握っちまって！」

「いや、そういうことやなくて」

「そうやぞ。その程度の謝罪で足りるわけないやろ」

「リオスは今まで俺にしてきた所業を振り返ってみろ」

俺の言葉を聞いてなぜか股間に手を伸ばしたりリオスの脛を蹴り上げて、悶絶するリオスを視界から外しアリエスを真つすぐ見る。俺の手を離れたアリエスは顔を赤くして、「ほんとごめんな」と照れながら笑っているが、どういうつもりなんだろうか。アホだアホだとは思っていたが、こんな会話が通じないくらいアホだったとは。これならまだ会話が通じるリオスの方がマシだ。

「今日のオカズはこの痛みにするか……」

やっぱりマシじゃない。

アリエスは俺に見続けられ、本気で俺が聞いていると理解したからか、自分の両手で頬を打って気を引き締め直した。俺と握っていた方の手を見て「なんか甘い匂いするな……」と言っているのには目を瞑って、真面目な顔をしているアリエスの話に耳を傾ける。

「それがさ。さつき完璧だと思った作戦が一瞬で破られただろ？」

で、実は俺こう見えて頭がよくないんだよ」

「そうやろな」

「意外かもしれないけど、このままどうやって軍から逃げたらいいのかもわからねえ」

「いやまったく」

「俺のことを天才だと思ってたお前らには悪いけど、バカな俺に協力してくれねえか？」

「ちよつとリオス」

真つすぐな目で俺を見てくるアホを一旦放置してリオスと呼ぶ。リオスはベッドから立ち上がって俺に近寄ると、鼻息を荒くしながら顔を近づけてきた。

「キス？」

「死ね。なあ、アリエスってあそこまでアホやったか？」

「んー、アホはアホやったけど、ちよつと違和感あるな」

クソリオスでもおかしいと思うなら、やはり今のアリエスはおかしい。少なくとも会話はできるやつだったし、ちよつと頭の足りない好青年だったはずだ。それがなんでこんな会話できないドアホになっ  
てしまったんだ。

そこで、俺はそういえばと思い出す。さつきいきなりのことで気が  
動転してわからなかったが、なんとなくアリエスの手が熱かったよう  
な……。

「ちよつとごめんな、アリエス」

「え、なんだ？」

アリエスに断りを入れて、その額に手を当てる。「冷たくて気持ち  
いいなー」と呑気に言うアリエスの額は、燃えるように熱かった。

「熱すぎるやろー！」

「え？ 私とエリスの仲が？」

「黙れハゲ！ おいアリエス、お前すごい熱やぞー！」

火傷しそうになるほど熱く、さつきアリエスの額に触った手を見る  
と少し赤くなっていた。常人の出す熱じゃない。というか常人がこ  
んな熱出したら一瞬でお陀仏だ。アリエスは炎の魔法使うから、それ  
が原因？ いや聞いたことがないぞそんなこと。それがあり得るな  
らそれ専用の治療法が出回ってるはずで、それを聞いたことがないっ  
てことは炎の魔法が原因つてのはほとんどあり得ない。

「うあー。マジか、熱か。最近やけに暑くなること多いなーって思っ  
てたんだよなあ」

「最近つていつから？」

「ちよつと見合い始めた頃？」

「ハハハ！ まさか女の子と会いすぎて恥ずかしくて熱こもってたん  
ちやう？ エリス、ここは私に任せえ。アリエスをしっかり発散させ  
てきたるから」

「んなアホな話あるか」

「んなアホな話があるんだよなあ」

俺とリオス、そしてアリエスのものでもない声が聞こえた。反射的にそちらを見ると、ドアの前に一人の男が立っていた。

茶色の髪をオールバックにして、藍色のジャケットとパンツ、内側に黒いタンクトップを着ている、髭が似合う渋い男。

「ダリア」

「よ、エリスちゃん。お邪魔してるぜ」

ドアに背中を預け、ひらひらと手を振ってくるのはいつもアリエスの付き人をしているダリア・エニーキス。いつの間に部屋に入ってきたんだという疑問はあるが、その前にめちやくちや気になるセリフを吐いていた。

「え、アリエスのやつほんまにそうなん？」

リオスも聞いていたようで、珍しく目を丸くして驚いている。リオスもまさか本当にアリエスが女の子と会いすぎて熱を出したんだとは思わなかったんだらう。非常識な行動ばかりとるが、変なところで常識があるやつだ。

リオスが聞くと、ダリアは頷きで返した。

「そこで寝ちまった王子がアホってことは知ってるだろ？ しかも純粹、女を知らねえ。『そういう目』で見られるってことに慣れてない。いや、見てくるやつはいたが王子自身が自覚できてなかったって方が正しいか」

話ながら、ダリアはタバコを取り出して大事そうに火をつけた。ゆっくり紫煙を吐きだして「吸ってもいいか？」と聞いてくるダリアに「吸う前に聞けや」と返すと、ダリアは渋く笑った。

「で、見合いを繰り返していくうちにこうなっちまった。んで逃げちまったってわけさ。我が王子ながら情けない話だ。さてここからちとお願いがあるんだが……」

ダリアは俺を見てリオスを見て、また俺を見た。

「エリスちゃん。そいつに女を慣れさせてやってくんねえか？」

「……え、連れ戻すとかは？」

「どうせ連れ戻しても同じことの繰り返しだ。なら今ここで慣れさせ

た方がいいだろ。ツバキには俺から言つとくよ」

肩を疎めるダリアに呆然として、熱に耐えきれず寝てしまったアリエスを見る。こいつに、俺が、女慣れさせる？

「……それってつまり、エリスとアリエスがえっちなことするってことやな!!!?」

バカなことをほざくりオスを、俺は容赦なく殴り飛ばした。



## 服を買いに行こう

「なるほど。エリスさんが王子を……」

ツバキには俺から言っておくよ、と言っていたダリアは、「あ、エリスちゃんもきてくれ。本人の了承も得てるって言いやすいから」とツバキのもとへ引っ張ってこられた。その間リオスはぶっ倒れているアリエスの看病にあたっている。……あいつ、酒飲ませたりしないよな？

そんなこんなで、俺とダリアはツバキに会いに王都へとやってきていた。世界を旅するアリエス一行、ついでに勇者パーティは王都に拠点を置いており、定期的に王都へ帰還する。帰還方法は転移魔法で、この世界にそれを使えるやつはほとんどいない。俺が知っている限り、ダリアと勇者くらいだ。

その王都のギルドで俺たちはツバキに会い、『アリエスに女慣れさせよう計画』を説明した。

ツバキは黒い髪を短く切り揃え、軽装の青い鎧に青いマントを羽織っている、どこかのバカと同じく日本刀を帯刀している美人さんだ。キリっとした目はその筋の人からしたらたまらないだろう。俺はそんな趣味はないからカッコいい目だな、程度にしか思わないが。

俺、というよりダリアから説明を受けたツバキは、顎に指を添えてじっと考え込む。そりゃ王子が貴族でもなんでもない世界を旅する冒険者に女慣れさせられるってんだから、側近としては考えることもあるわな。俺だってあんまり納得してないし、そもそも俺自身が女っぽくない。ダリアは「だからいいんだ」って言ってたが、むしろ女慣れさせるなら女っぽい子の方がいいんじゃないだろうか。

「……まあ、王子が平気なのは王妃様、私、エリスさんくらいのものであるが、流石に王子の問題をエリスさんに協力してもらおうのは申し訳ない」

「聞いたかダリア。ってわけで俺帰ってもええよな？ 第一俺何回も言うけど女の子らしくないし、もっと相応しい人おるやろ」

「いや、エリスさんは十分女の子だ。美しくも可愛らしい容姿に優し

い性格。言葉遣いは少々荒いが、私が男なら放っておかなかただろう」

「……」

「エリスちゃんって男から褒められても何の反応もしねえのに、女の子から褒められると恥ずかしがるよな」

「やかましいわ」

前世が男だったから仕方ないだろ。今の自分が客観的に見て整っている容姿だつてことはわかっているが、自分で思うのと他人に言ってもらうのでは別で、更に下心丸出しの男からと純粹に褒めてくれる女の子から言われるのではまったく別だ。身近にいた男がリオスだったから男には何も期待してないってのもあるが、女の子からの褒め言葉にはどうも慣れない。

熱くなつた顔をぱたと手で扇いで冷まし、気分を落ち着かせる。それから少し考えて、確かにリオスが平気な女の子で、女慣れさせるのに向いてるのは俺くらいか、とも思ってしまった。

王妃はめちやくちや綺麗だが実の母親だから当然なしで、ツバキはへたな男よりカッコいい。少々お胸も……いや、女の子らしさが胸の大きさに決まるって言うわけじゃないが、アリエスくらいアホな男なら、その辺りも重要になってくる気がする。それに、ツバキは側近をずっとやってきたから距離が近すぎる。

ってなると、俺しかいない気がしてきた。まさか王子に娼婦をあてがうわけにもいかないし、俺が手頃なところだろう。いやらしいことをするわけじゃないが、アリエスは友だちだから協力してやってもいいが……。

「それに、エリスさんも乗り気じゃないだろう？ 君も女の子だ。想い人でもない相手の女慣れを手伝うなど躊躇して当たり前だ」

「ん、いや、別にやんのは構わんのやけど、やり方がなあ」

「お？ いつの間にか乗り気になってるな」

今まで渋っていた俺が急に乗り気になったのが不思議だったのか、ダリアがなぜかにやにや笑いながら俺を見てくる。だつて仕方ないだろ。一国の王子が見合いもできないクソザコだつてなるのはみつ

ともない。別にアリエスのことが嫌いなわけでもないし、やることもないから仕方なくだ。仕方なく。

ツバキに褒められたからとかじゃ決してない。

「そうか？ 協力してくれるならぜひお願いしたいが……エリスさん。失礼だが服はそのローブしかないのか？」

「おう。魔法で一瞬で綺麗にできるし、おしやれ楽しむ趣味もあらへんし」

「そりやもったいねえ。せつかくこんな綺麗なのによ」

「どうも」

「やっぱ反応違いすぎるって」

ダリアがめちやくちや綺麗な女の子だったら俺も照れていただろうが、ダリアは渋くてカツコいいおっさんだ。普通の女の子なら照れていただろうが、生憎俺は中身が男のややこしい女。いくらカツコよくても照れるなんてことは絶対ない。

「うん、それなら女の子らしい服装で王子と接してみてくれ。あまりにも過激なものはダメだろうが、そうだな、ワンピースくらいなら王子も普段のエリスさんとの違いにどぎまぎしながらも普通に接することができらるだろう」

「わ、ワンピースか……パンツスタイルのがええんやけどなあ」

「そんなんじや意味ねえだろ。パンツスタイルでも可愛いには変わりねえが、それじゃいつものエリスちゃんとおんまり変わんねえ。もつとも、下着の方のパンツスタイルなら王子もイチコロだろうが、あ、すみません」

「女性への下劣な発言は控えろ、ダリア」

流れるようにセクハラをしたダリアにツバキが刀を突きつける。俺が何か言う前に刀を抜いて注意するなんて、さては慣れてるな？

ツバキは「まったく」と言つて刀を鞘に納めて、俺の手を取った。女の子特有の柔らかかきとは違い、細く白い女性らしさを残しながらも、硬い武人のような手にドキツとしていると、ツバキがずんずんとギルドの外へ向かって歩き始め、つられるように俺の足も動いていく。

「行くぞダリア。まずはエリスさんの服を買いに行く。男視点の意見

も聞かせてほしい」

「得な役割だなあ。了解。悪いなエリスちゃん。初めての可愛らしいカッコはリオスに見せたかっただろうに」

「なんでそこでリオスが出てくんねん！ 死ねハゲ！」

「俺そんなに怒らせるようなこと言ったか？」

髪の毛を気にしているダリアに中指を立て、俺たちは服を買いにギルドを出た。

\*

「よっ、エリス！」

「なんでリオスがここにおんねん」

服屋へ到着すると、なぜかそこにはリオスがいた。無駄にいい笑顔で手を振っており、道行く女性たちが輝くリオスをちらちら見ているのがわかる。こいつ顔はいいもんな。顔は。スタイルも。性格はクソ。

「百歩譲って王都におけるのはええねん。リオスならすぐにこれるやろうし、俺らも王都行くって言うてたし、でも俺らの行く場所に先回りしてんのはなんでやねん」

「エリスが可愛いカッコするんちやうか？ って思って」

「キショくて怖い話すんなや」

キショすぎて思わず後ずさりする。常日頃からセクハラしすぎてついにエスパ―へ進化するなんてとんでもないやつだ。もうこの世界にこいつに勝る変態はいないだろう。俺はもしかしたら明日には貞操が散っているかもしれない。

「でもエリスも時々あるやろ？ 『あ、今リオスこんなことしてるなー』 ってなんとなくわかるの」

「ないわ」

「やつぱさそうやろ？ 照れるわあ」

「おいダリア。今すぐこいつ遠くに捨ててきてくれへん？」

「どうせすぐここにくるだろ。無駄なことはしたくねえんだ」

そう、こいつは『迅雷の騎士』なんて恥ずかしい二つ名で呼ばれている通り、とんでもなく速い。疑似的な雷速での移動が可能であり、

街から街へ移動するのなんて一瞬だ。初めてそれをやった時は「これですぐにエリスのとこへ駆けつけられるな」とキメ顔で言っていたので、迷わず首を締めあげた。今思うとそんなにセクハラでもなかったんだが。

「まあいいじゃないかエリスさん。リオスはエリスさんのことを一番理解している。エリスさんに似合う服もこの場にいる誰より理解しているだろう」

「そうやでエリス！ 常日頃からこんなん着て欲しいなーっての思ってるんやから！ 例えばこれとか！」

そういつて取り出したのは、葉っぱが三枚。

「これを乳首と股間に貼りつけんねん。新しいやろ？」

「服のはじまりやないか！ もつとも原始的やろ！」

「そもそもなぜこの店にそのようなものが売られているんだ……？」

ツバキの疑問はもつともで、リオスが持っている葉っぱにはちゃんと値札がついている。大丈夫なのだろうかこの店。もしかしてリオスが経営してる店とかじゃないよな？

「まあこれは1割冗談」

「ほぼ本気やないか」

「ちゃんとわかってるで。普通の女の子っぽいカッコしてアリエスに女を意識してもらおってことやろ？」

「お、流石リオスだな。バカのクセに察しがいいじゃねえか」

「こら、協力してくれているんだ。バカというのはやめろ」

「じゃーん！ これ！」

「すまんダリア。こいつはバカだ」

せっかくフォローしたツバキの気持ちを踏みにじったのは、リオスが取り出したハート型のシール三枚。色はドピンク。あれつけて出て行ったらむしろ引くだろう。

「エリスみたいにガード固い女の子がこれつけて男の前出て行ったらそんなもんセックスやろ！ 女らしさの頂点！」

「ふむ、確かに。だが最初にそれは刺激的すぎる。それは慣れてきてからにするとして、初めのうちはやはりワンピースの方がいいと

思うのだが」

「慣れてきてからも着いひんわ！ 何納得しとんねんツバキ！」

「すまんエリスちゃん。ツバキはこういうのに疎いんだ」

いや、疎くてもハート型のシールをよしとはしないだろ。しかも俺が自分用に使うんじゃないかって、アリエスの前であれ着る……いや、貼るんだぞ？ 側近としてダメだろ。

リオスはツバキの「初めのうちはワンピース」と聞いて、「それなら……」と店の奥に引っ込んで、やがて一着のワンピースを手から店から出てきた。お前ここの店員なの？

「ほなこんなんとかえんちやう？」

「おお、いいじゃないか」

リオスが持ってきたのは、腰のあたりにリボンのついた淡い水色のワンピース。半袖つてところが少し気になるが、さっきのを見せられてからだだから随分マシに見える。……これ、もしかして二億貸してって言った後に無理って言われて、じゃあ二万貸してって言うみたいなやり口？

「その調子でどんどん見繕ってくれ。もちろんハート型のあれも買って構わない。お金は私とダリアが出そう」

「なんでそんなハート型のアレに執着してんねん」

その後、リオスが中心となって俺の服を次々に購入していった。もちろんハート型のアレの購入は阻止した。

女になる？

最初にリオスが持ってきたまともな服であるワンピースを身に纏って立つのは、アリエスががいる部屋の前。ダリアとツバキは「あとは任せた」と言って仕事に戻っていき、リオスは「抑えられそうにないわ」と別のところに行っている。あいつがセクハラをせずに我慢したことから、今回はよっぽどなんだろう。

ガラになく緊張する。思えば女の子らしい格好をしたのは小さい頃以来だ。親に逆らえず着させられ、すぐに反抗を覚えたからそれも少しの間だけ。もちろん大きくなってからは女の子らしい格好をしたことは一度たりともない。

リオスの前なら緊張もなにもなく、むしろ警戒心しか抱かないのがアリエスは普通のアホな男。どんな反応をされるんだろうとそれこそ女の子みたいなことを考えてしまい、頭を振ってその考えを吹き飛ばしてドアを開けた。

そこにはベッドから起き上がって、俺をきよとした顔で見るアリエス。黙ったままでいるアリエスに居心地の悪さを感じながら、後ろ手でドアをそっと閉じる。

しばらくして、アリエスが口を開いた

「びつくりした。いつもと違う格好してるから」

「あまりにも喋らんから喋られへんくなったんかと思ったわ」

とりあえず悪い感触ではなさそうなのでほっとしつつ、アリエスのいるベッドに腰掛ける。すると、アリエスはそっと俺から距離を取った。

「おいアリエス。それは流石に失礼やろ」

「わ、悪い。いやさ、いつも男友だちっぽく接してたけど、やっぱり女の子なんだなって思ってたさ」

「……」

おい普通に恥ずかしいぞ。ダリアに褒められた時は何も思わず、リオスには警戒心しか抱かなかったのに。クソ、下心のない男の言葉がこんなに恥ずかしいなんて思わなかった。元々俺は男だから余計に

恥ずかしい。褒められる恥ずかしさだけじゃなく、なんでこんな格好してるんだっていう恥ずかしさも合わさるからめちやくちや恥ずかしい。

「うん、可愛いな。いいんじゃないね?」

「やめろ」

恥ずかしそうに微笑みながら褒めてくるアリエスの顔に枕を押し当てて黙らせる。これじゃアリエスに女慣れさせるんじゃないくて、俺に男慣れさせるっていう目的が変わってしまう。というかそうだとアリエスにまず説明しないと。

「あー、アリエス。今な、王様にダリアたちが説得しに行ってくれてる。見合いはちよつとストップして、まずアリエスが女の子に慣れなアカんつてことで」

「マジか。あの熱結構苦しいからありがたいっっちゃありがたいけど……女の子に慣れるってどうやって?」

察しが悪いアリエスらしく、『女の子慣れさせる』ってことと『俺が女の子らしい格好をしてきた』ってことが直結しないらしい。自分から言うのは恥ずかしいから勝手に察してくれると助かったんだが、仕方ない。

「あー、その、な」

「?」

「俺が、その、うん」

「エリスが?」

いまいち言い切れずにもじもじしていると、アホなアリエスには珍しく察したようで、頬をかきながら「もしかして、エリスが?」と聞いてきた。それに小さく頷くと、アリエスは何も言わずに黙ってしまった。

「なんやねん文句あんのかコラ」

「いやいや! 嬉しいって!」

「嬉しい?」

「あ」

しまった、と今度は自分で口を抑えて黙り込むアリエス。まあ俺は



見た目いいから嬉しいって言うのもわかるが、まさかアリエスがそんなことを思うなんて。別に引きはしないからそんな「言ってしまった」みたいな顔しなくてもいいと思うんだが。

「えっと、見合っしてるとな、思うことがあるんだよ」

「何を？」

「結婚するならアリエスみたいな子がいいなって」

俺はすぐさまベッドから離れ、椅子に座った。このまま一緒にベッドの上のいたら何かマズい気がして。まさかアリエスに限ってそれはないだろうが、元男の俺だからわかる。男は獣だ。表面上下心が見えなくても、いやらしい気持ちを持っていない男なんて一人も存在しない。

俺の行動を見て慌てたアリエスが「違う違う！」と弁明を始める。

「いや、アリスなら緊張もしないし、いいやつだし、ずっと一緒にいても楽しいだろうなって思っただけ！」

「何がちゃうねん！ まさかアリエスが俺をそんな目で見てたとは思わなかったわ！」

「リオスみたいな目では見てないって！ それにどうせ結婚するなって話だから、距離の近い女の子を思い浮かべんのは当然だろ!」  
「……まあ、それは確かにそうやけど、そんな聞かされたらやりにくくなったわ」

「ごめんて」

俺は男友だちみたいな感覚でちよつとからかってやろうと思っただけなのになんだこれ。クソ、これならリオスの方がマシなまである。あいつはわかりやすいセクハラしてくるからぶつ飛ばすだけでいいのに、アリエスは何も悪いことをせずに純粹に褒めてきて照れさせてくる。

このままでは俺が心まで女の子になってしまおうと気を引き締め直し、あくまで俺は男だと意識した。外からどう見ても女の子でも、俺は男だ。

「そういうことやから、しばらくは俺と色々してもらおうわ。言うても一緒に外出したり、部屋でだらだら過ごしたりするだけやけど」

「おー、なんか緊張するな」

「思っても言うなそんなこと」

「こっちまで緊張してくるだろ。」

「でもリオスは大丈夫なのか？ あいつのことだから、エリスが他の男と一緒にいるの耐えられないんじゃないか？」

「あー、まあ大丈夫やろ。耐えられへんならそもそも許してないやろうし」

「それもそうか」

「そういえばそうだ。あいつ「エリスの初めては私がもらう！」っていつも言ってるからこの状況だつて許せないはずなのに、なんで許可したんだろう。いや、許可もらわなくても勝手にやるけど、何も言つてこないのはそれはそれで不気味だ。」

「……今あいつが俺の服持つてるけど、なんか変なことしてないよな？ まさかそれができるから許可したとか？ いや、あいつも流石にそこまでではないはずだ。度を越えたセクハラは絶対してこないし、多分。」

「んー、じゃあまずは普通に触れてみるか」

「手とか握るってことか？ ここ来るときにやったし、エリスなら別に平気だぞ」

「ま、形だけでもやりやええやろ。女の子に対して耐性つくかもせんし」

「椅子から立ち上がりベッドに乗る。するとアリエスは俺から目を逸らして手を引いた。そして俺から避難するように壁際へ寄つていく。」

「おい」

「はは、その、な？」

「な？ って言われても。平気なんちゃうんかい」

「いやー、改めてエリスって可愛いなって思つてき。いきなり顔が近くにきたからびっくりにしちゃって」

「お」

「こいつ、俺を口説き落そうとしてるのか？ さつきからひつきりな

しに褒めてきて、まさか女の子らしい格好をした途端めちやくちや意識するようになったとか？ でも残念だったな。俺の心は男。いくら10数年女として生きたからといって、前世の男としての意思はそうそうなくなることはない。

「やっぱ手握るの無理かも。緊張するわ」

「はあ？ 別に手握るくらいそんなハードル高いことでもないや、ろ？」

意地になってアリエスに詰め寄ると、突然アリエスが俺の手を握った。その手には汗が滲んでおり、高い体温が手に伝わってくる。突然のことだったからびっくりしてアリエスを見ると、俺を真剣な目で見ていた。

「汗、わかるだろ？ これくらい緊張してるんだ」

言つて、アリエスはそつと手を離し、俺から目を逸らす。

「今まで男友だちみたいに接してたのに何言つてんだって思うかもしれないけど、エリスは女の子なんだから、あんまり距離詰めてくんない。俺だつて男なんだぞ」

「……おお」

蚊の鳴くような声を出して、ベッドから降りて椅子に座る。そのまま気まずい沈黙が場を支配した。

いや、そんな反応すんなよ。なんだ、アリエスに女を慣れさせように見せかけた俺に女を自覚させようってやつかこれ。リオスの計画か？ 俺が女を自覚した瞬間においしくいただこうってやつか？

クソ、それならアリエス以上の適任はいない。俺に僅かながらある女の部分がビンビン『こいつはヤバイ』って語り掛けてきてる。頑張れ俺の中の男。俺が好きなのは女の子で、男なんて恋愛対象になりはしない。生まれてきたその時から、一族の血が絶えることを申し訳なく思いながら生きてきたんだ。今更それは変わりはない。

「悪い。変なこと言った」

「……いや、ええよ。うん」

なぜかアリエスを見れないので下に視線を落とすと、自然と内股になつていた。なんだこれ女みたいじゃねえかと足を開けようとする

が、今ワンピースだということを思い出し、断腸の思いで内股を続行する。クソ、だからいやなんだこんなひらひらしたやつ。否が応でも女の子みみたいな仕草を強要させられる。

「そ、そういうやもう熱は大丈夫なのか？」

気まずさを取っ払うために話を振ると、アリエスも気まずさを感じていたのかすぐさまそれに乗っかってきた。視線はこつちに向けないまま。

「お、おう。ただ、まだ暑いな。——多分、エリスのせいだ」

アリエスが、俺を見た。

「でもさ、苦しくはないんだ。心地いいっていうか、なんつーか、俺アホだからわかんねえけどさ。こんな熱なら、ずっとあってもいいって思ってる」

「おい」

アリエスがベッドから抜け出して、俺の前に跪いた。まるで忠誠を誓う騎士のように。そして俺の手を取って、下から俺を見上げる。

「だから、頼んでもいいか？俺に女慣れさせてくれ」

「……しゃ、しゃあないなあ。うん。そうせなアリエスの次の代の跡継ぎがおらんようになるし、俺が一肌脱いだるわ」

「……なあエリス。俺さつき結婚するならエリスだって言ったけど」

「いい雰囲気台無しサンダー！」

雰囲気を押されてアリエスの言葉を待っていると、突如雷を纏ったリオスが部屋に突入してきて、俺とアリエスの間に割って入った。

あつつつぶな！もう少して俺が女になるところだった！ナイスリオス！今回ばかりはナイス！女として見た時のお前は最低だが、男として見た時のお前は最高だ！

「おいアリエス！私のエリスになんちゅーいやらしいことしとんねん！あんなメスの顔させおって！私の前でそんな顔したことないのに！」

「は、はあ!?誰がメスの顔しとってん！てかずつと見てたんかりオス！」

「おー見てたわ！なんやねんおい！あのまま告白されとつたら絶

対領いとなったやるエリス！ 私にえっちさせてって言われても絶対領かんクセに！」

「純粋な告白とえっちさせてっていう欲棒を同列に扱うなや！」

「えっちさせてっつのも純粋やるが！」

「欲望にやるが！」

先ほどまでアリエスに対して緊張していた俺は、リオスと取っ組み合って喧嘩する。その様子をアリエスが安心したように笑ってみていたというのを、後日こっそり様子を見に来たダリアから教えてもらった。

ほな俺を妊娠させろや！

「今から危うくアリエスに股を開きそうになったエリスへの説教を始めたいと思います」

リオスが突入してきて、その後。俺はリオスの部屋へと連行されて、正座させられるかと思いきや「女の子が床に座ったらあかんやろ」とベッドに座らされた。スマートが過ぎてこいつがモテる理由をなんとなく察し、俺の前にしゃがみ込んでパンツをのぞこうとしてきやがったので蹴り飛ばして制裁し、頬を赤くしたりリオスの説教が始まった。

「おいエリス。私には全然股開かんクセに、アリエスに開きそうになった理由教えてもらおか！」

「男としての誠実さ、性格」

「はつきり教えるなや！」

お前が教えるって言うたんやろ。

実際、リオスは俺以外の女性に対しては誠実も誠実。少しちやらかたところはあるが、セクハラはしないし、セクハラはしないし、セクハラはしない。

つまり、こいつからセクハラを取ればただのいい男になる。顔とスタイルがよくて優しく強い。だからと言って股を開くかと言われればそうじゃないんだが。

「まずセクハラやめろや。二人の時はまだええとして、他の目があるところでセクハラって普通にあかんやろ」

「え？　じゃあ今エリスの足をしゃぶりつくしてええってこと？」

「じゃあの意味もわからんしそのセクハラをやめろ言うてんねん！」

俺の足に手を伸ばしてきたリオスを避け、ベッドから降りしていた足をベッドにあげる。あぐらをかくと見えてしまうので、正座の姿勢から左右の足を外側に向ける女の子のような座り方をすると、リオスが興奮したように頷いた。

「エリスってこうしてみるとほんまに可愛いよなあ」

「は？　黙れ」

「アリエスと対応の差激しない?」

そらセクハラしてくるクズと聖人とじゃ対応も変わってくるだろ。てかりオスも前世じゃ女だったんだから、やられて嫌なことともわかってるはずなのになんでこんなことになってしまったんだ?

「どうやったらセクハラやめれんねん?」

「うーん、無理やな」

「努力はせえや」

うーん、と考えたフリをしてきつぱり「無理」と言うリオスに青筋を立てながら、俺の今後にも関わるのでセクハラをやめられるような提案をしていく。

「俺がきつたない格好するとかは? それやったら流石に萎えるやろ」

「それって一緒にお風呂入りましようっていうアピール?」

「ポジティブでセクハラお化けとか最悪やなお前」

汚い女の子見たら萎えろや。……と思ったが、好きな女の子なら別に汚れていても気にはするが萎えるなんてことはない気がする。あれ? 俺もおかしいのかこれ?

「じゃありえへん話やけど、俺が他の男と付き合ったら? 流石の

リオスでも他人の女に手は出さへんやろ?」

「エリス以外やったらそうやけど、エリスが他の男にとられたら絶対取り返す」

「喜んでええのか悪いのか……いやキシヨいわ」

女の子ならドキッ、の一つや二つするんだろうが、ただただキシヨい。なんでこいつ俺にこんな執着してるんだ? そりゃ前世から一緒だつてのはあるが、こいつの容姿ならよりどりみどりで、俺に執着する必要なんかないだろ。

「セクハラするってことは性欲を発散できてへんってことやろ? それやったら店行って女抱いてきたらええんちゃう?」

「私そんなことしたら『エリスの方が絶対にええんやろなあ』ってやってる最中に言うてもうて、女の子泣かしてまうやん」

「我慢しろや! お前のええところは俺以外の女の子を傷つけへんところ

「やろが！」

「セックス最中の男なんて正常な判断できひんに決まってるやろ！」

「経験ないから知らんねんボケ！ 悲しいこと言わすな！」

最中に正常な判断はできないんだろ？ な、なんてイメージでしかわからない。悲しいことに俺は前世でそんな経験もなく、もちろん今世でも経験がない。けどリオスなら性欲まみれだから正常な判断はまったくできなさそう。こいつアホだし。

「それやったらオナニーして性欲発散せえや！ 毎日朝一発やってたらセクハラする気も起きひんやろ！」

「お前私の性欲の豊富さ舐めてんのか！」

「なんで怒られてんねん！」

リオスが眉間に皺を寄せてベッドに上がってくる。そのまま俺に顔を近づけてくるので、俺も負けじと近づけて睨み合った。

「オナニーなんてもうしてるに決まってるやろ！」

「だからそれを朝にせえって言うてんねん！」

「朝も昼も夜もやってるわ！ 抑えきれへん性欲をそこで発散してセクハラしてるに決まってるやろが！」

「それ発散できてへんねん！」

てかマジか。こいついつの間にか？ 男が隠れてオナニーすることの難しさを俺は知ってる。朝と夜はまだしも、昼はどこで？ 大体一緒にいるが、そんな様子はまったく見たことがない。もしかして『迅雷の騎士』はそっちも迅雷の如き速さなんだろうか。

「大体わかってんのか！ エリスの女の子らしい格好見せられた私の性欲の溢れ具合を！ エリスがアリエスと喋ってる間、計5回やったぞー！」

「無尽蔵か！ この短時間に何億の種無駄にしとんねん！」

「あ、無駄打ちって言うてみて？」

「やかましいわ！」

セクハラをかましてきたリオスにビンタを打とうとするが、寸前で受け止められる。こいつ力強つ、男と女だから当たり前だけど、こうしてみるとやっぱり全然力の差がある。俺、筋力はほとんどないから



なあ。

「それやったら目隠しして俺を見いひんようにしたらええやろ！　そしたらある程度性欲も抑えられてマシになるわ！」

「私はエリスの匂いでも興奮できるに決まってるやろ！」

「じゃあ鼻に栓でもせえや！　これで俺で興奮せえへんやろ！」

「じゃあ聞こえてくるエリスの声はどうすんねん！　正直今エリスの声聞いてるだけで興奮してるんやぞ！」

「じゃあ耳にも栓しろや！」

「なんでセクハラやめるためにほとんどの感覚奪われなあかんねん！」

「じゃあないやろお前がセクハラしてくるんやから！」

でも確かに、セクハラをやめるためだけにほとんどの感覚を奪ったら、いざ戦闘つてなった時こいつは役立たずになってしまう。こいつなら目と鼻と耳が機能しなくても戦えそうな気はするが、それで勝てない相手と対峙したら死ぬのは確定だ。それは困る。

「せやったら仙人になるために修行行けや！　そこで性欲も断ち切ったらセクハラもせえへんくなるわ！」

「お前私のエリスに対する想いみくびんなよ！」

「綺麗な風に言うな！」

ラブソングの歌詞みたいなことを言っておいて、その中身は性欲濡れ。ぜびさっきの言葉をリオスのファンに向けてやってほしい。幸せすぎて死んでしまうくらい効果があるだろうから。絶対に俺には向けずに。

「確かに仙人になったら性欲も断ち切れるわ！」

「断ち切れるやろがい！」

「でももし修行の途中でエリスへの想いが爆発した場合、私は全世界を敵に回してもエリスに襲い掛かってたまりにたまった性欲をぶつけてもうたらどうすんねん！」

「それを我慢して我慢してなるのが仙人やろ！」

「我慢できひんほど好きやから言うてるんやろが！」

「さつきから何惚れさせるような言い回ししてんねん！」

相手がリオスだとわかっていてもちよつとドキツとしてしまった。こいつ、セクハラしてくる上性欲からくる行動なのに、好意はマジなんだよな。だからやりにくい。わかりやすいセクハラならぶっ飛ばすだけでいいのに、こうやってストレートに好意をぶっつけられるとちよつと困る。

しかし、どうするか。感覚を奪うのもだめ、他で発散してもらうのもだめ、仙人になるのもだめ。かくなる上は。

「……ほな俺を妊娠させろや！」

「お前何言うてんねん」

勢いが止まってぼかんとするリオスに、一気に捲し立てる。

「感覚奪うのも他で発散すんのも仙人になんのもあかんやったら、俺と一回セックスして妊娠させたらセクハラする気もなくなるやろ！セクハラしようとしても『あ、今お腹の中に二人の子どもがおるんやな』って思っただけで冷静になれるわ！もし子どもが生まれたとしても、そんなときには父と母になつてセクハラするような間柄でもなくなつてるからこれで、」

「もうええわ！」

「押し倒すな！」

捲し立てている途中に肩を押されてベッドに押し倒される。リオスを見ると、悲しそうな目で俺を見ていた。

「私子ども作んのってそんな流れですもんちやうと思っねん」

「お前がセクハラやめられへんって言うからやろが……」

「別に私セクハラやめたいって言うてへんし」

「思うとけよそれは」

「ごめんな、と言いなながら俺を抱き起こすリオスの胸を小突く。確かにこいつはセクハラをやめたいなんて一言も言っただけじゃなかった。危ない。勢いでこいつの子どもを産まされるところだった。」

「でもそんなにセクハラが嫌やったんならもうセクハラせえへんわ」

「でもどんなことしてもセクハラやめられへんやろ。どうすんねん」

「エリスに彼女になつてもらおうわ」

「誰がなるか！」

バカなことを言ったりオスを殴り飛ばしたところで、アリエスが部屋に入ってきて「俺放置……っ」と寂しそうな目で聞いてきたので、リオスを放置して二人で出て行った。

頭冷やしとけバカ。

## 勇者カイズ

バカなことをしていたら辺りはすっかり暗くなっており、綺麗な満月が俺たちを見下ろして「今日も一日頑張ったね」と労ってくれている。

そんな月を、俺は居酒屋の二階の窓から見上げていた。月は好きだ。大人しいから。

「エリスって月が似合うよな」

「キザやな」

リオスを放置してギルドを出た俺とアリエスは、飯を食うにはちょうどいい時間だと居酒屋へ訪れていた。基本的に冒険者はギルドで飯を食うが、別にギルドで食わなくちゃいけないなんていう決まりはない。むしろ、荒くれものどもがあまりいないギルド外で食う方が俺は好きだ。

「にしても久しぶりだなー。ダリアやツバキがいない時に飯食うの」

「そーいやアリエスは王子やもんな。そら一人にできひんか」

こいつがアホすぎて時々忘れそうになるが、こいつはれっきとした王子。本来なら護衛がついて然るべきなのだが、今は目的が目的。一応女慣れさせようっていう目的で俺と一緒にいるんだから、そこに他のやつが乱入してきたらちよつとおかしなことになる。さつきリオスが乱入してきたときみたいに。

まあ、あれはあれで助かったんだが。

「? どうしたんだ? ちよつと顔赤くなってるけど、もう酔っちゃまった?」

「いや、気にすんな」

記憶から消し去るようにジョッキの中の酒を一気に飲んで空にして、店員さんにもう一杯追加で頼む。そしてテーブルの上に並べられた酒の肴をフォークでぶっ刺して口に運ぶと、アリエスが唐突に笑い出した。

「なんやねん」

「いや、こつちのがエリスらしいなって。へたな男より男らしい」

「ありがとう。お前ええやつやな」

俺に対して男らしいという言葉は最高の褒め言葉だ。俺が男であることの何よりの証明であり、リオスのように今世の性別に引つ張られていないことを意味する。俺は意思が強い。えらいしかしい。

「うん、そうしてる方が好きだな！」

「アリエスって平気でそういうこと言うよなあ。あんま女に対して軽率に好きとか言うなよ？」

こいつの場合男女のアレ的な意味じゃなくてただ純粋な好意100%なのだろうが、女の子がアリエスみたいな王子でイケメンで強く優しい男に『好き』なんて言われたら、勘違いするに決まってる。王子が女の子をたくさんひっかけるなんて、跡継ぎを生むって意味でならいいかもしれないが、尊厳もクソもなくなってしまう。

「わかってるって。俺もそこまでアホじゃねえし」

「そっぴや人の気持ちを弄ぶようなアホはやらかさへんしな」

店員さんが持ってきてくれた酒を飲み、思い返す。

確かにこいつはアホはアホだが、『俺がいないとダメだ』と思わされるようなアホしかやらかさず、人に迷惑をかけるようなアホはほとんどやらかさない。『人に支えられて生きること』に向いてるんだ。

それは、上に立つのではなく隣に立つ王になれるっていうこと。威厳とか堅苦しいものは似合わないが、ついて行きたくなる、そんな魅力がアリエスにはある。

「そっぴやカイズのやつ元気かなあ。そろそろ王都に戻ってきてもいいんじゃねーの？」

「勇者様は忙しいんだよ。俺たちの平和を守るのにな」

カイズ・イベリス。それが我らが勇者さまの名前だ。今どこで何をしているのかはわからないが、どうせどっかの誰かを助けているに決まってる。ただカスミも言っていたが、王都に召集されてもおかしくない時期だ。もしかしたら、近いうちに会えるかもしれない。

カイズはセクハラしてくるリオスと違って紳士なやつで、しかもアホじゃない。落ち着いて話せる貴重なやつだ。カイズと一緒にいるとあいつのファンからの目が怖いつてところだけが残念なところ。

「てか王都に戻ってくる予定があるんやったら、アリエスには知らされるんちゃう?」

「あー、俺そういう大事な話とか聞かされないんだよな。うっかり漏らしちゃだめだからって」

「大丈夫なんか未来の王様」

うっかり漏らしちゃだめだからって、こんな信用ならないやつがトップに立ってもいいのか? だめだ。こいつが王になったとしても、難しいことは全部他のやつらにやらせて、自分は戦うだけの置物になってそうだ。

ただ、「なんとかなるって!」と笑顔で酒を飲むこいつを見ると「なんとかなるか」と思わされる。まあ、こいつの周りにいるのは優秀なやつらばかりだ。こいつ一人がポンコツだったところで、国はうまく回るだろう。

そうして二人で飲んでいると、俺の隣に誰かが座った。不躰なやつだなとそいつを見ると、そいつは俺とアリエスが見知った顔で、つissäつき名前を出したやつだった。

「カイズ! 久しぶりだなあ!」

「久しぶり、アリエス。エリスも、元気になっていたか?」

「おー。噂をすればってやつやな。お仲間はどうしたん?」

「リオスにとられた」

あー、と顔を引きつらせて「ごめんな?」と謝っておく。

カイズの仲間は、全員女の子。というのも、この世界では女の子の方が高い魔力を持って生まれてくる。必然、強さで上に立つのは女になり、『勇者』だとか『王族』だとか、何か特別な血筋を持っていなければ女より高い魔力を持って生まれることはめったにない。リオスっていう例外もいるが。

そんなこんなで、魔力の高い女の子で固められたカイズのパーティ。当然女の子たちは頼れるリーダーである勇者カイズに惚れている、かもしれない。何度か会ったことがあり、俺とカイズが話しているだけで睨んでくるようなやつらだ。

しかし、パーティの女の子たちはリオスと頗る仲がいい。なぜかは

わからないが、こうしてカイズが俺たちのところへくると最初は決まってリオスのところへ飛んでいく。……やっぱリオスは元女だから、気の合うところがあるのだろうか。

「もしかしてリーダーとしてリオスの方が優秀なんだろうか……」

「ないない。あれがリーダーってどんなお笑いやねん」

「でもリオスってエリスの前以外じゃ案外真面目だぜ？　俺は向いてると思うけどなあ」

「アホ。ここは向いてないって言うてカイズを慰めるとこやろ」

「はは、いい、エリス。アリエスの飾らない優しさも、エリスの気遣いも、俺はどっちも好きだ」

本当にリオスはなんでこの二人を見習わないんだろうか。もし小さい頃からリオスがこんな風だったなら、今頃俺も股の一つや二つ開く女になってたかもしれないのに。イケメンがすぎる。この二人がいるなら、俺は男に生まれなくてよかったかもしれない。

もし俺が男に生まれてきてこの二人の隣に並んでいたら、俺なんてゴミにしか見えなかっただろうから。

カイズの前に頬を赤くした店員さんから酒が置かれ、それを持ったカイズがそつと掲げる。乾杯ってことだろう。

「何に？」

「再会に、でいいだろう」

「んじゃ、俺たちの再会に」

乾杯！　とアリエスの声に合わせてジョッキを合わせる。そのまま三人同時に酒を口につけて一気に喉へ流し込んだ。

ジョッキを下ろすと、カイズが勢いよく酒を飲んでるのが見えた。何かを忘れるように飲むその姿に親近感を覚え、疲れてるんだろうな、と思わずカイズの肩にぽん、と手を置いた。

「……？　ああエリス、今日の君は可愛らしい格好をしているな。それに、綺麗でもある。水の魔法を使う君らしい色だ。俺は初めて君に会ったときから美しい女性だと思っていたが、服装一つ変えるだけでこうも印象が変わるとはな。街を歩いていて不埒な男に声をかけられなかったか？　俺は君の友人だ、心配くらいはする。もしよかった

ら、そんな心配がないように君の隣を俺が歩くことを、許してくれないだろうか」

「この格好を褒めてくれてっていう意味で手え置いたわけちゃうし、にしては褒めすぎやクソ勇者」

肩に置いていた手で軽く肩を叩き、「まったく」とぶつくさ呟いて口に肴を運ぶ。まったく、こいつはお世辞でこういうことを言えないタチだから、全部本心つてのがタチが悪い。そらモテるわ。忌々しい。「俺がこんな格好してる理由聞かへんの？」

「？ 別におかしいことはないだろう？ 君は女性だ。可愛らしく、綺麗に着飾っていて何を疑問に思うことがある」

「見ろアリエス。これが女慣れした男の姿や」

「勉強になるなあ……」

スマートすぎて惚れる。この後カイズと一緒に寝てもいい。いざ本番ってなったときにやっぱり耐えられなくて大規模な水の魔法で流し飛ばすに決まっているが。

でも今は流れで言ったが、本当に女慣れっていう意味ならカイズの言動、行動を見ていけば勉強になると思う。女に対する気遣いもそうだが、こいつはモテるがゆえに好意のかわしかたもうまい。アリエスは死ぬほどこいいやつだから好意をかわすなんてことはできないから、あんな熱を出すくらい悩んでいたんだろう。

「アリエス、もしかして俺と一緒にいるよりカイズを見て学んだ方がええんちゃう？」

「んー……いや、エリスと一緒にの方がいいかな」

「待て、何の話だ？」

アリエスに提案するとはねのけられ、話の内容がわからないカイズが俺に何の話をしているのか聞いてくる。そういやこいつ結構な寂しがりやだったな……。

「アリエスが見合い始めたってのは知ってる？」

「ああ。アリエスと偶然会ったときに聞いた」

「そしたらこいつさ、女慣れしてへんからそのせいで熱出してもうて。せやから、俺がアリエスに女慣れさせることなってるん」



「……もしかしてそれでその服を？」

頷くと、カイズは神妙な面持ちで何やら考え始めた。一体何考えてるんだ？ もしかして俺に女らしさがないから意味ないだろ、みたいなことか？ これでも見た目は立派な女だから、意味がないってことはないと思うが。

しばらく考えた後、カイズは口を開く。一瞬アリエスの方を見た気がしたがすぐに俺を見て、

「すぐ王都に向かう予定だったが、エリスがいるならばしばらくここに滞在することにしよう」

「お、そか。楽しくてええやん」

この時の俺は、友人であるカイズの滞在を心から喜んだ。

このことが俺の貞操を守る物語が加速することになるなんて、思いもしなかったから。

## 勇者カイズの分析

突然だが俺、カイズ・イベリスはエリス・ゼーラが好きだ。それはそうだろう。特別な手入れをしていないと言っていたのにも関わらずさらさらと綺麗な髪、透き通った美しくも可愛らしい瞳、幼さを少し残しつつも美しい顔立ち。更にパーソナルスペースが狭く、平気で隣に座ったりボディタッチをしたりしてくる。勇者という大層な役柄上女性の扱いは少々心得てはいるが、あんなことをされてしまつては惚れるなという方が無理な話だ。

「え!? 昨日アリエスとカイズと飯食つてたん!? そんなもん三人でセックスしてましたって言うてるようなもんやんけ! 私にもさせろ!」

「してへんわ!! お前みたいな欲望濡れのスケコマシとこの二人を一緒にすんなや!」

加えて、あのリオスとともにいて、まだ軍にあいつを突き出していない時点で彼女がとてつもなく優しい女性だということがわかる。あんな毎回毎回セクハラを働いてくるような男と一緒にいられるなんて正気じゃない。正気じゃないと言うとエリスがとんでもない女性だという風に聞こえてしまうが、あれを受け入れられる女神のような女性だという意味で俺は言った。勘違いしないでほしい。

ギルド内、俺とアリエスが隣に、エリスとリオスが隣に。テーブルを挟んで座り、流れで俺がこの街に滞在することを告げるついでに旅の話でもしようと思つたが、リオスのセクハラが発動してしまつたためそもいかないらしい。

「……」

「どうした? アリエス」

「ん? いや、なんでもねーよ!」

俺が滞在する理由になつた男、アリエス・クロード。かなりの人格者でイケメンでしかも強い。少々頭脳が足りないところはあがるがそれを補つて余りあるスペックを持つ男。

この男の女慣れを、エリスが手伝うというのだからそれはもう滞在

するしかない。ふざけてるのか？　アリエスに女慣れさせるっていうことは、エリスが女を知るっていうことになるんだぞ？　男勝りなエリスが段々女の子になっていくってことなんだぞ？　アホか。昨日ワンピース姿のエリスを見ただけで俺の心臓は解放のドラムだったっていうのに、アリエスはそれを、エリスの女の子を誰よりも早く間近で見られるということだろう？

許せん。

「あ、おいカイズ。何しとんねん」

「ああすまない。いつもダイヤモンドで出来たグラスを使っているものだから、つい力を入れすぎてしまった」

怒りのあまりグラスを持っていた手に力が入ってしまい、グラスが砕け散ってしまった。中に入っていた水がテーブルの上にまき散らされ、ついでに俺の手からも血がしたたり落ちる。

「つたく、しゃあないなあ。『回復魔法』」

エリスが身を乗り出して俺の手を取り、呆れながら回復魔法をかけてくれる。

……言った方がいいだろうか。今着ているのはローブじゃないから、身を乗り出すと、その、胸がな？　うん。いやあ、俺は治療してくれてる手を見ているだけなんだけど、その結果視界に入っちゃったっていうか。どうしようかなあ。

リオスを見る。般若。

「エリス。もう大丈夫だ、ありがとう」

「ん？　おーそか。大したことなくてよかった」

にとと笑うエリス。中指を立てるリオス。テーブルの上を片付けるアリエス。アリエスほんといいやつだな。好ましいよ。

ただ、こういう時。リオスなら「あー!!　カイズがエリスのおっぱい見て興奮しとる!!」って言いそうなものだが、そういうことを言わないあたりリオスも人間できてきているというか、人を落とすようなマネをしないところが好感を持てる。その代わりきっちり俺のことは嫌いっぽいから、そこも人間らしくてむしろ安心する。リオスは俺がエリスのこと好きって気づいてるだろうしな。

「おいカイズ。死ね」

「なんでそんなこと言うねん！」

今も死ねって言われたし。

エリスに叩かれて「ああん！」と気持ちの悪い声を出しているリオスを見ながら、この二人はお互いのことをどう思ってるんだろうかと思ふと考える。見ているだけではただの友だち同士に見えるが、どうもそれ以上の何かでつながっている気がしてならない。

「……なあカイズ」

「ん？ どうしたアリエス」

エリスとリオスの関係も気になるが、アリエスも気になる。いや、そういう目で見てるとかじゃなくて。

先ほどからアリエスはふとした瞬間エリスを見ている。まあ同じ空間にいるからそれは無理もないだろうと思ってしまうが、その目が問題だ。あれは、確実に恋する男の目。惚れた女を見る目だ。俺にはわかる。なぜなら俺もエリスに惚れているからだ。

そんなアリエスがリオスと喧嘩しているエリスを見たまま、

「エリスってさ、可愛いよな」

「はあ!？」

俺に話しかけてきたにも関わらず、エリスにも聞こえる声で爆弾を投下した。今しがたりオスを締め上げていたエリスはリオスをべちやりと床に落とし、暴れたことでズレた服を直し始めている。

「いきなり何言うтонねん！」

「あ、ワリイ。エリスに言うつもりじゃなかったんだけどよ。最初会った時から可愛いなーとは思ってたけど、最近そう思うことが多くなっただけよ」

「……!!」

この男、天然……!! 俺は戦慄した。

世の中には、女たらしと言われる人種が存在する。あの手この手で女の子をたらし込み、自分に夢中にさせるといふ手腕を持つ男のこと。

しかし、その中でも天性で女の子をたらし込む者がいる。その者の

ことを、『天然タラシ』と呼ぶ。アリエスは、それに該当する。

今この状況がその証拠となり得る。あの男勝りでなぜか男に褒められてもどこ吹く風で女性に褒められると赤面するエリスが、男であるアリエスに褒められて赤面している。えっ、可愛い!!!

ごほん。

……エリスと恋仲になるのは、難しいと思っている。エリス自身あまりそういうことに興味を持っていなさそうだというのもそうで、隣にリオスがいるのもそうで。ただその障害をすべて跳ね除けてしまうのが、『天然タラシ』。つまり、天性でエリスに女性を自覚させ、惚れさせてしまえばその障害はゼロになる!

「いきなり変なこと言うなアホ! そら俺かて自分のこと可愛いとは思うけど、あんま正面切つて言うことちやうやろ!」

「ハハ、悪い。でもそう思っちまったんだから仕方ねえだろ?」

「そうやとしてもいきなりその、んな口説くようなセリフ吐かれたら嫌って思う子おるかもせんやろ! 氣い付けろってことや!」

「エリスは嫌だったか?」

何っ!? こいつ、『天然タラシ』の上に『子犬属性』まで持っているだど……!!?

『子犬属性』。普段は明るく子犬のように回って回り、『好意を持っている』というより『懐いている』イメージが強い。これだけだと異性として意識しづらくバッドステータスに見えるが、『天然タラシ』と合わさることでもんでもない破壊力を発揮する。その効果は、今発揮された。

『子犬属性』の真価。それは、『しゅんとした問いかけ』にある!!!

子犬のように『ダメだったか?』みたいなことを言われて『ダメ』と言える者は存在するだろうか? いや、存在しない。更にこれがただの『子犬属性』だけであれば「もう、仕方ないわね」で終わるが、『天然タラシ』と合わさることによって「……も、もう、仕方ないわね」になってしまう!!

つまり、『天然タラシ』で照れさせた後、『子犬属性』で照れさせるという波状攻撃、二段構え、超激烈コンボが完成するのだ!!!

「……別に、嫌なわけやないけど」

「そっか！ ならよかった」

そして、この『天然タラシ』と『子犬属性』はエリスのような女性に効果的……!! 他の属性に比べてかなりエリスの懐に入りやすい!! 俺も入りたい!!

いや、アリエスの属性を分析している場合じゃない。このままだと「女慣れしねえとダメだし、デートでも行くか？」ってアリエスがサラって言ってエリスが連れ出される未来が訪れる!! それを台無しにするには、

《リオス！ 台無しにしてくれ!》

《自分でやれやハゲ》

見放された上にハゲにされてしまった。どうする？ 脳を振り絞って考えろ！

告白してみるか？ 少し想像してみよう。

「エリス。好きだ」

「ん？ 俺も好きやで」

ダメだ。エリスはなぜか身内からの好意は男女のあれこれじゃないと思う悪癖がある。ムードがない今伝えても俺が玉砕して惨めな気持ちになるだけだ。

リオスみたいな行動をしてみるか？ 少し想像してみよう。

「エリス!! ベロチューさせてくれ!!!」

「は、え、か、カイズ？ どないしたん？ なんかあったん？」

ダメだ!!! ぶっ飛ばされるならまだマシだが、俺がそんなイメージなさすぎてエリスに心配されてしまう！ それはそれでいいが、今後ずっと腫物扱いされてしまう!! そうなってしまうえばエリスと付き合うなんて夢のまた夢だ!!

……!! 思いついたぞ。なんだ、簡単なことだ。エリスは俺のことを男だと意識していない。つまり、友だちとしてエリスをここから連れ出せば済む話だ。

「エリス。少しいいか？」

「んー？」

「買い物に付き合ってくれないか？　せつかく滞在することにしたからな。どうせなら旅の準備もしておきたい。エリスの方が店に詳しいだろうから、迷惑でなければお願いしたい」

「ん、ええで。なんかりオスも静かやしほっといてもええやろから」

よし！　とテーブルの下でガッツポーズ。エリスは面倒見がいい。だからこういう頼み事はリオスが邪魔をしてこなければすんなり通る。今まで旅をしてきた俺の頭脳は伊達じゃないっていうことだな  
「なあ」。

？

「えっと、そのさ。なんかさっきの今で言いにくいけど、俺、今日エリスとデートしようと思ってたからさ。遠慮してほしいっつーか」

「なっ」

「……」

俺は、完全にアリエスのことを舐めていた。俺とエリスの間で約束が交わされれば「お、じゃあ俺は今日ゆっくりしとくかー」って言うか「お、じゃあ俺もついてついていいか？」って言うくらいかと思っていた。

それが、まさかエリスに対する独占欲を出してくるとは。こいつ、男だな。

さて、どうするか。事情を考えれば俺が引き下がるのが普通。ただ今のアリエスとエリスを二人きりにしたら何が起こるかわからない。俺としては非常に邪魔したい。

その答えを弾き出したのは、さっき俺を見放して傍観を決め込んでいたりオスだった。リオスはいきなり立ち上がり、雷光を放ちながら。

「せやったら、決闘や！　エリスがアリエスとデートするか、カイズとデートするか、私とセックスするか！　三人で決めようやないか！」  
「何自分の欲望ねじ込んでんねん!!」

「え？　肉棒をねじ込む？」

「殺す」

……なるほど、これで結果的にうやむやにしようっていうことか。

流石だなりオス。色々台無しにすることに関しては右に出る者はいない。

「負けないぜ、カイズ」

アリエスはやる気になっていた。うやむやになっていなかった。周りにいたやつらも「エリスをかけての戦いだ!!」「賭けようぜ!!」と大盛り上がり。

……まあ、やるからには負けないが、エリスこういうの嫌いだろうなあと思いつながらエリスを見てみると、額に手を当ててため息を吐いていた。勝つても負けてもあんまりよくなかないか、これ。



## 女を賭けた戦い

正直言つて、リオス、アリエス、カイズの三人の戦闘力は世界でもトップクラスだ。

まずリオス。『雷』の属性魔法を操る、全距離対応のオールラウンダー。範囲攻撃もできれば近接もできる。更に魔力が多くてほぼ雷速での移動が可能。魔力切れを狙おうにも、リオスが速すぎて逃げられないし攻撃力が高すぎて耐えられない。

アリエス。基本は炎を纏つてぶん殴るといふ魔導師にあるまじき戦闘スタイルだが、出力がけた違い。一撃一撃が噴火と見間違えるほどの強大さで、初めて魔法を使った時災害と間違えられたらしい。拳に纏つて戦うのも、そのまま放出するとほんとに災害になりかねないからと言っていた。

カイズ。勇者という肩書に相応しい強さを誇っている。戦闘スタイルはいたつてシンプルで、『近づいて斬る』。魔力で自分を強化し、魔力を剣に纏つて振り回すだけ、と言えば弱そうに聞こえるが、カイズの剣は魔法を切る。驚くことなかれ、カイズは魔法を見ただけでその弱点を理解することができ、更に自身の魔力も高純度なため、剣一本で災害を潜り抜けることができる。

「さあ覚悟はええかエリスに群がるアホども！ 私がバシツと勝利収めて、エリスと熱い夜過ごしたるわ！」

「エリスは今日俺とデートすんだよ！」

「……」

街の広場に結界を張り、その中央で三人が向かい合い、結界の外をやじ馬が困んでいる。そのうちの結構な視線が俺に向けられており、「確かに取り合うくらい可愛いな」「バカ、知らねえのかお前？」

ちよつと押せばやらせてくれそうで有名だぜ？」「何つ、ちよつと押しに来る」「やめとけ。あそこにいる三災害を相手にしたくねえだろ」と好き勝手口走っている。なんだちよつと押せばってやらせるかカス。

ていうか、アリエスとカイズはこんなことしていいのだろうか。仮にも一国の王子と勇者なのに、一人の女を取り合つて決闘って印象悪

いどころの騒ぎじゃないだろ。それに立場が立場だから、どっちかが勝ったら噂が独り歩きして俺と本当に付き合ってるみたいになりになりかねない。

「……なあ二人とも。やっぱりやめにしないか？ 女性を景品扱いにするのはよくないだろう。話し合いで解決しないか」

「はあん？ 今更何言うтонねんカイズ。こんな大事になつて今更やめますつて誰が納得すんねん！」

「んー、でもそうか。それもそうかもしんねーなあ」

流石カイズ！ ちよつと難しい顔してるなつて思つたらやつぱり今の状況をよく思つてなかつたのか！ 野次馬から「ヘタレ勇者！」「不能ー」つて好き勝手言われてんのは気にすんな！

カイズがああ言つてくれれば、この決闘はなしにできる。アリエスもアホだが常識人だし、カイズの味方をしてくれるはずだ。リオスも二人が乗り気じゃなかったら勝負仕掛けないだろう。これでこの居心地の悪い場所からおさらばできるぜ！

「なるほどなあ。エリスのために命懸けれんのは私だけつてことかあ」

「上等」

高揚感に包まれていた俺の心は一気に絶望へと叩き落とされた。なんで今の挑発に乗つちやうんだ……？ いや、大事に想つてくれんのは嬉しいけど、この場面でその挑発に乗つたら俺のこと好きみたいになるからやめろよ。バカじゃねえの？

「ほな、このコインが地面にいたら開始な」

「いつでもいい」

「おうー」

もう話し合いの余地はなく、決闘が開始されるらしい。リオスがコインを真上へと弾き、

そのまま跳躍して、コインを叩き落とすとともに雷光が迸った。

「ハッハッハ！！『コインが地面にいたら』つて言うただけやからなあ！！ ちゃんとルールは守つてるで！！」

雷を纏いながら宙に浮かび、高笑いするリオス。もう魔王側だろあ

いつ。やる事が汚すぎるし醜悪すぎる。しかも相手が勇者と王子だから最悪だ。盛り上がりつつるのはリオスに賭けてるやつらだけで、他からは大ブーイングをくらっている。

ただ、今のでやられるようなら勇者なんて名乗れないし、王子も務まらない。

雷によって生まれた土埃の中から、斬撃と炎がリオスに向かって放たれる。高笑いしつつも仕留められていないとわかっていたのか、余裕の表情でリオスがそれを避けて着地すると同時、土埃が晴れた。

「予想はしていた」

「リオスが正々堂々やってくるわけねーしな！」

そこにいたのは、真っ白な魔力を纏ったカイズと、真っ赤な炎を纏ったアリエス。二人の姿が見えた瞬間、黄色い声援が上がった。

今この状況だけ見れば二対一に見える。というかついでにリオスを討伐してくれないだろうか。あいつ邪悪だし、一回痛い目見なきゃわかんないだろうし。いや、何回か痛い目見せてるけど、それだからもつと痛い目見せないといけない。

「いくぞ」

なんて考えている間に、カイズの姿が掻き消えたかと思えば、リオスの背後にいた。そのまま剣を振りぬくが、今度はリオスの姿が消える。

どこだ、と探す前に炎と雷がぶつかった。

「やるじゃんー！」

「ちよつとは手加減せえアホどもー！」

今のは、リオスの移動先を読んでアリエスが炎を放ち、それを読んでいたリオスが雷を放って、お互いにぶつかり合ったということか。やだやだ化け物のやることは。目で追えねえし予測ですらついていくのがやっつとだし。今もバカでかい斬撃が二人に向かって飛んでいってるし。そもそもなんだよ斬撃飛ばすってファンタジーかよ。ファンタジーだわ。

もはや人智を越えた大怪獣バトルに呆れすら感じていると、背後から肩を叩かれた。振り返ってみれば、銀髪赤目のホストみたいなイケ

メン。

「なんですか？」

「いや、ちよつと気になつてね。彼らが戦う理由になつてる子がどんな子なんだろうって」

「その言い方やめてもらえませんか？ 今の状況めつちや不服やし」

「はは、ごめんごめん。でも許してあげて。男つてああいう生き物だから」

まあわかる。俺も元男だし、今も心は男だし、なんか勢いとかノリで突つ走つて変なことになるつていうのはよくあつたし。だからまあ、不服は不服だけど別に怒つてはいない。ただなんか厄介なことになりそうだなつて思つてるだけで……。

やつぱムカついてきたな。リオスはともかく、勇者と王子つて立場ちやんとわかつてんのか？

「でも、彼らが君を賭けて争うのもわかるなあ。こんなに可愛くて綺麗なんだから」

「そりやどうも」

ああ、こういう輩か。

自分で言うのもなんだけど、俺はかなり見た目がいい。だからこうやつて言い寄つてくる輩は何人もいたし、その度に蹴散らしてきた。主にリオスが。

今はリオスは戦つてるから自分で対処しないとイケないのが面倒くさい。こう考えるとあいつつて便利だったんだなと思ひながら、自然と腰に回された手を跳ねのけようと腕を上げる。

いや、上げようとした。のに、腰に触れられた瞬間感じたことのない快感が体中を駆け巡つた。

「はは、やつぱり処女か」

「な、にを」

「何だろうな？ とりあえず、いただきます」

そのまま体を引き寄せられ、首筋を舌が這つてくる。生暖かいざらざらした感触が首筋を舌から上に撫で、体の内側が熱くなる感覚とともに腰が抜けそうになるが、男の手によつて無理やり引き寄せられて

行為が続けられる。

かと思つたその時、見慣れた雷光が瞬いて、気づけば俺はリオスの腕の中にいた。ぼんやりした視界には、アリエスとカイズの背中も見える。

「なアにしとんやこの変態が……!! 往来でエリス抱き寄せて首筋に舌這わせて羨ましいことしておつて!!! ぶっ殺す!!!」

「隠しきれねえ欲望が溢れ出てんぞ、リオス」

「リオスの変態なのは今更だろう。それより、新たな変態を討ち滅ぼすべきだ」

「その言い方したら後で私も滅ぼされるように聞こえるからやめてくれへん? つと、あー、んなことより。エリス、大丈夫か?」

「ひゃつ」

耳元に口を寄せて囁かれた瞬間、電流を流されたかのような感覚に襲われた。思わずリオスがいたずらしたのかと抗議の目を向けるが、リオスが珍しく目を丸くしてぽかんとしている。

リオスじゃ、ない?

「おいお前エリスに何してん!! こんな可愛い声出されたらこらもうセックスやる!!!」

「なっ、どうしたんだよりオス! エリスに何かあつたのか!!」

「……お前、さてはインキュバスだな?」

「いかにも」

カイズの言葉とともに、男が紫色の魔力に包まれる。その魔力が晴れると、そこにはコウモリの翼が生え、頭に濃いピンク色の一對の角が生え、股間と胸だけを隠した超ド級のド変態がいた。

「う、ウワー!!! 変態や!!!」

「お、おい!! そんな恰好してたら風邪引いちゃうぞ!!!」

「くっ、まさか見た目だけで俺がダメージを受けるなんて……!!!」

あまりの見た目のインパクトに災害級だと恐れられているうちのアホ共が軒並みやられてしまった。いや、そりゃそうなる。いやに股間もっこりしてるし、なぜか自信満々の表情だし、キシヨすぎる。あれがサキュバスだったらエッチだと思ってしまうのに、男つてやつは

これだから……。

「ふっ、あまりの美しさに気が動転しているようだな……」

三人の血管がピキピキ音を立てているのが聞こえてくる。わかる。あいつクソムカつくよな。

「私は魔王軍幹部、色欲のアスモデウス!! その女にかけた魔法はちゅっちゅべろマーキング淫獄紋!! その女の首筋を見てみる!!」

「な、なんやこれ!! ハートの中に唇が敷き詰められた紋章が……!!」

頭悪すぎる!!」

「そいつを刻まれた者は、全身性感帯になる!!!」

「何っ!? でかした!!」

「リオス?」

「なんてことすんねんこのドグサレ悪魔!! あとでその魔法私にも教えろ!!」

いい加減にしておけよという意味を込めてアッパーカット。いつも通り「あふん!」と気持ち悪い悲鳴をあげ、リオスは倒れ伏した。

「それを解くには、相応の『経験』が必要だ!! 頭の中がお花畑な貴様らならそれが何かわかるだろう!!」

……経験、それはつまり、そういうことか? いや、冗談だろ?

風が吹くだけでもちよつとびくつてなるこれが、『それ』をしないと解除できない?

「ハッハッハ!! 耐えきれなくなったらいつでも私たちの下にくるがいい!! 私たちはいつでもお前を迎え入れよう!! では、さらばだ!!」

高笑いしながら、アスモデウスが霧となって消えていく。アリエスが炎を放ち、カイズが斬撃を放つが元々実態がなかったのか、それは直撃することなくすり抜けていった。

「……なあ、二人とも」

「おう」

「なんだ」

「じゃんけんしよか」

「待てやコラ!! なんのじゃんけんやそれ!!」

ちなみに、アリエスは首を傾げており、カイズはなぜかやる気だつた。お前ふざげんなよ。